# 「アルジェリアのフランス人」のモラル
## ──「客」をめぐって──

猪　又　俊　樹

## はじめに

アルベール・カミュが1957年に出版した，生前最後の中編集『追放と王国』の中に収録されている「客」には，その当時のカミュの心理状態や社会状況が色濃く反映されている。その後書き進められ，カミュが1960年に自動車事故で死亡したときに鞄の中から見つかったノートに綴られていた小説『最初の人間』は非常に自伝色の強いものであった。『最初の人間』でカミュは自伝的なスタイルをとりながら，自分を含めた「アルジェリアのフランス人」を記録に残そうとしていた。アルジェリアをモデルとした土地を舞台としている「客」には『最初の人間』の前兆を見ることができるのではないか。この論文ではその「客」から『最初の人間』につながっていくものを中心として考察して行きたい。

## 1．アルジェリアにおけるフランスの植民地教育

「客」の主人公ダリュはアルジェリアの小学校教師である。そこで最初に植民地アルジェリアの教育がどのようなものであったのかに触れる必要がある。カミュの伝記『アルベール・カミュ〈ある一生〉』でオリヴィエ・トッドはフランスの（フランス植民地の）教師という職業について次のように述べている。

> 小中学校教師にはある使命がある。子供たちを育て，批判精神を開かせ，初等教育の，フランス教育第一段階の，公務員を志望できる修了証書をとる準備をさせることである。教師は進歩の信奉者である。[1]

これはトッドが，カミュの小学生時代の教師であるルイ・ジェルマン(2)について説明したものである。彼に限らずフランスの小中学校教師は，フランス共和国の社会秩序を浸透させるのを目標としていた。そして当然そのことこそが「進歩」だと思われていたのである。ダリュも同じくフランス人の教師である。彼はアルジェリアの高原でおそらく大部分がアラブ人であると思われる生徒たちを相手に勉強を教えている。ダリュは自分の教師という職業に誇りを持っており，高原の痩せたその土地も愛している。それは次の部分からも理解できる。

> この悲惨の前で，この辺ぴな学校でほとんど修道士のように暮らしており，その上自分が持っているわずかなもの，そしてこの辛い生活で満足していたダリュは，その粗塗りされた壁, その狭いソファー，その白木の棚，その井戸，水や食物の一週間分のその補給とともに，自分を領主のように感じていた。そして，前触れもなく，息抜きの雨もなく，一挙にこの雪だった。このように，この土地は生きるのに辛く，人間さえおらず，それなのに人間は何も解決しなかった。しかしダリュはそこで生まれた。よそではどこでも，彼は追放されたように感じた。(3)

「しかしダリュはそこで生まれた」(Mais Daru y était né.)とあるように，カミュはまず彼がその地方出身であるがゆえにこの土地を愛しており，粗末な家でも満足していると書いている。彼のような献身的な努力をしている教師たちについて，カミュは1939年に新聞に書いたルポルタージュ「カビリーの悲惨」(4)でも扱っており，彼らは内陸部の困難な孤独の中で自分の仕事を愛しているのだと言う(5)。ダリュもこの熱心な教師たちの一人をモデルとして考えられたのであろう。このような辺境の小学校教師たちの目的とは，もちろんトッドが言うように子供たちにフランスの教育を受けさせることであるが，それはアルジェリアのアラブ人の子供たちを「進歩」させるという目的でもある。その教育とは「フランスの教育」であり，決してアルジェリアの歴史や言語を習うのではない。「客」の中でもそのことを指摘している部分がある。

> 黒板の上には，違った色の四色の色で描かれたフランスの四つの大河が，三日前からそれぞれの河口に向けて流れていた。(6)

このように，ダリュが教えているのは，明らかにフランス本国のことであって，アルジェリアのことではないことが分かる。つまりこれはフランスの植民地に対しての「同化政策」であり，教師たちはその第一線を担っていると考えることもできる。ここでは詳しくは立ち入らないが，アルジェリア民族解放戦線（Front de libération nationale 以下 FLN）が独立を目指して 1954 年に蜂起した時に，最初に犠牲になったフランス人が，高地オーレス地方の小学校教師ギイ・モネロであったこと(7)は偶然とはいえないかもしれない。

植民地の教育がどのようなものであったのかをさらに見てみよう。その内容について，マリの教育学者アブドゥ・ムームニは次のように書いている。

> 教育はすべてフランス語でほどこされた。教員がアフリカでの言語を使用することを禁止されただけでなく，生徒も学内で母語をもちいると処罰を受ける決まりになっていた。(…)多くのアフリカ人が訳もわからずにくりかえしとなえさせられた，数々の嘘とでたらめを生涯忘れないであろう。いわく「我らが祖先ゴール人は…」「サモリを打ち破った勇士らをたたえよう。鉄の桎梏は打ちくだかれ，奴隷は解放された。ありがとうわれらの征服者よ」「フランスは植民地において現地人を息子として扱い…」等々。(8)

『アルベール・カミュ〈ある一生〉』を見ると，アルジェリアでも同じような同化政策が小中学校において実施されていたことがわかる(9)。それではこの教育を少年であったカミュはどのように受け取っていたのであろうか。『最初の人間』の主人公ジャックを見てみよう。そこには，シロッコと太陽と海の土地にいるフランス人の少年が，単純にフランス本土の雪のある風景に憧れている姿を見ることができる(10)。もちろんジャックの場合，それほどまで憧れるのは，日常の貧困からの逃避であると言える。実際のカミュ家も同じように貧困であった。だがアラブ人の子供たちとアルジェリアのフランス人の子供たちが，同じように教師の言うことや教科書に書かれていたことを受け取ったとは考えにくい。さすがに中等教育のリセともなると，フランス人の生徒にも同化政策のあまりに牧歌的内容を疑問視する者も出てくると(11)，トッドは書いている。このような当時のアルジェリアにおけるフランスの教育政策を踏まえた上で，「客」の教師ダリュを見てみよう。

## 2.「アルジェリアのフランス人」としてのモラル

カミュはダリュをどのような人物として描いているのだろうか。自分の生まれた土地を愛しており,「よそではどこでも,彼は追放されたように感じた」というダリュの人間像は何を意味しているのだろうか。小説の最初に,ダリュの学校にバルデュッシと言うコルシカ島出身の老憲兵が,従弟を殺したというアラブ人を連れてくる。そしてそのアラブ人をタンギュイと言う混合村[12]の警察に連れて行くように頼む。バルデュッシはダリュに頼む時,「友情のこもった微笑とともに見て[13]」,ダリュがそれを断っても,「俺はおまえが正しいことを言うのを知っている[14]」などという。これらの言動から,バルデュッシはダリュを,少々反抗的であったとしても,あくまで自分の側の人間であると見ていることがわかる。しかしダリュはバルデュッシに反抗しており,アラブ人をタンギュイの警察に引き渡すのは自分の信念から外れると考えている。このダリュのアラブ人を警察に引き渡したくないという信念について考えてみたい。そのためにはアルジェリアのフランス人気質について考える必要がある。カミュは入植しているフランス人であるアルジェ人気質について 1939 年のエッセイ『結婚』で次のように書いている。

> 彼らにはめいめいのモラルがある。しかし,きわめて固有のものだ。彼らは母親に《背いたり》しない。通りでは自分の妻を尊敬させる。妊婦には敬意を払う。一人の相手に二人でかかってゆくようなことはしない。なぜなら《それはきたない》からだ。この基本的な掟を守らぬ者に対しては《あいつは男じゃない》ということになり,事件は片がついてしまう。[15]

このようにアルジェの「男」たちにとって重要なのは,女性には敬意を払い,喧嘩の時も卑怯な真似をしないということである。これは「男」についての話であり女性はこの掟の中には含まれない。何故なら女性は同等に戦う相手ではないからである。つまり喧嘩のときは完全に平等な条件で戦わなくてはならず,それを守らないのは卑怯であって,二人で一人を襲ったりするのは「男」ではないのである。このような彼らのモラルの背景について,内田樹は『ためらいの倫理学』で『異邦人』を例に挙げて次のように説明している。

（ムルソーが）「それはどうでもいいことだ(16)」というのは，個々の事象について，そのつど価値付けを可能にしてくれるような汎通的な準拠枠組，「大きな物語」が失われたという事態を，主体の側から表明した言葉である。大戦間期，カミュのみならず多くの同時代の思想家たちが，それぞれ固有の仕方で類似した経験を語ろうとした。（…）

カミュはこの世界の「無—底（an-archie）」の経験を「等格（égal）」という言葉で言い表した。この言葉は，単に準拠枠組としての上位審級（神，絶対精神，あるいは「歴史を貫く鉄の法則性」）が失われたために，善悪正邪理非の判定が不可能になったという事態を指しているだけではない。「等格」は「ふたつのものが間に差異がなく，等価的である」という語義どおりの状態をも意味している。(17)

ここで内田が使用している，失われたという「大きな物語」については，ジャン=フランソワ・リオタールの説明を参考にしたいが，彼はそれを「《精神》の弁証法，意味の解釈学，理性的あるいは労働者としての主体の解放，富の発展 18」のようなものであると述べている。つまりこれは哲学，マルクス主義，資本主義等の今までの近代世界自体を支えてきた理念，制度であることが分かる。リオタールの言う「大きな物語」は，ポスト・インダストリー時代の発達した先進的な社会で，科学の進歩等により「大きな物語」が求心力を失い凋落するというものである。しかし内田の言う「大きな物語」は「大戦間期」と言うように，戦争に深く関係するものである。準拠枠組「大きな物語」を「上位審級（神，絶対精神，あるいは「歴史を貫く鉄の法則性」）」と言い換えているように，ここで大きな問題になっているのは人間に対しての「モラル」であることがわかる。つまり内田は「大きな物語」を倫理的な部分に引き寄せて使用している。神や道徳などの今まで日常で一般的に通用してきた「大きな物語」としての理性が失われた大戦間期に現れるのが，ふたつのものに差異がないという「等格」としてのモラルである。準拠枠組がない以上，モラルは目の前の生身の人間を相手にしたとき，その場のみで，卑怯か卑怯でないかだけが問題となることになる。それを内田は「異邦人のモラル(19)」と言うのである。この「異邦人のモラル」で重要なのは卑怯か卑怯でないかであるが，それは理由なくして喧嘩することは許されず，究極的に突き詰めれば自分の命を賭ける者の

みが命を奪うことができるということである。この暴力論についてカミュは『反抗的人間』で，帝政ロシアのテロリストを例に挙げて説明している。彼らは帝政を支えるツァーや大公たちの命を狙いながらも，命というものに対しては最新の注意を払っていたと言う。暗殺しようとした人物が子供と一緒にいた時はテロを中止した。彼らは暴力が避けられないことは認めていたが，それが正当化できるとは思っていなかった。凡庸な人間なら全ての直接的な暴力は許せないという原理のもとに満足するだろうが，それは歴史の名のもとでは暴力は必然的であるという現在のニヒリズムであるとカミュは述べ，そして次のように言う。

彼らがそれでも必然的だと思ったものを正当化することが不可能だと知ってから，彼らが想像したのは，自己の身体を正当化に賭けられないか，自分たちを犠牲に供することによって自己に課せられた質問に答えられないか，ということであった。彼らにとって，彼らまでの全ての反抗者たちにとってと同じように，殺人と自殺は同一のものであった。それゆえ一つの命はもう一つの命によって支払われるのであり，これら二つの犠牲からある価値の約束が現れるのである。[20]

暴力を正当化するのは不可能である。しかしそれになんとか価値を見出そうとするならば，自分の身体を賭けるしかない。このテロの対象に自分の身体を差し出すことで釣り合いを取ろうというこの考えは，その場のみで平等な条件で戦い卑怯なことを排すという「異邦人のモラル」に直接つながっていくことが分かるだろう。「汝殺すなかれ」という神によるモラルが信じられればそれに越したことはない。しかし戦争はこの道徳の「大きな物語」を失墜させた。その状況下のモラルは目の前の人間に対して等格であるかということが最も重要な点となる。このように，内田が言う「等格」（égal）は『反抗的人間』に幾度となく現れる「平等性」（égalité）と深く関わりを持っている。カミュは『反抗的人間』で「平等性」をこだわりを持って使っている。なぜならそれは『異邦人』から変わることなく続いていく暴力を使う人間に対するカミュの重要でもっとも基本的なモラルだからなのである。

これはアルジェの男たちにも当てはめられており，民族や人種など関係なく

平等な条件で喧嘩するのが「男」だということになる。ムルソーとレイモンのアラブ人との抗争も，このモラルに沿って行われており，相手を射殺するのも命をかけて一対一で戦うのだから「異邦人のモラル」には反さないことになる。それに対して第三者である裁判所などが自分を裁くということこそが，「男」らしくないのだということになるのである。この「異邦人のモラル」から「客」のダリュを見てみよう。バルデュッシの連れてきたアラブ人に対して，ダリュは殺人を行った人間への嫌悪を感じつつも，彼ら同士の身内の抗争には自分は関係がないと考えるであろう。それは彼らの問題であって，自分が口を出す問題ではない。そして憲兵である仕事のせいではあるが，喧嘩に割り込む第三者であるバルデュッシはモラルに反しているといえる。しかし彼はアラブ人を置いていってしまった。自分も「男」らしくない役割を押し付けられたのである。バルデュッシも自分の仕事がモラルに反していると考えているのは，「ああ嫌な仕事だ。隠退したいものだ。[21]」と言っていることや，ダリュに「俺はおまえが正しいことを言うのを知っている」と言うことから納得できる。つまりアラブ人を警察に引き渡すのはこのモラルに反しており，それは「男」ではないというのはこの「アルジェリアのフランス人」であるダリュとバルデュッシの間では，言葉にする必要もない共用された価値観なのである。このようにカミュはダリュを典型的なアルジェリアのフランス人の気質を持つ人物として描いている。しかし既に述べたように，彼はそれと同時に「進歩」を標榜する小学校教師である。次にこの教師という職業がダリュにどのような影響を及ぼしているのかを見てみよう。

## 3．アルジェリアとフランスの「掛け橋」としての教師ダリュ

アルジェリアの高地の教師であるダリュは，生徒に勉強を教えているわけであるが，その生徒たちは，「客」の中では，「高原に散らばっている村々にすむ[22]」とあり，これはやはりフランス人ではなく，アラブ人かベルベル人であろうと考えられる。ダリュの「アルジェリアのフランス人」のモラルに反するのと同時に，教師という生徒たちに対する立場上，生徒たちを裏切ってアラブ人を警察に引き渡すのは，かなり抵抗があると思われる。「この辺ぴな学校でほとんど修道士のように暮らしており，その上自分が持っているわずかなもの，そし

てこの辛い生活で満足していたダリュは，(…) 自分を領主のように感じていた」のは，特別彼が厭世家だという訳ではなく，やはり教師という，「進歩」の推進者たる職業に誇りを持っていたからである。彼はアラブ人やベルベル人に対してフランスの教育を受けさせるために自分がいると考えている。これは教師がアルジェリアとフランスの仲介者たる役割を担っているのだといえる。そのためにも，アラブ人を警察に引き渡すことはどうしても避けたいのは当然であろう。「客」の中でもダリュはアラブ人が勝手に逃げてくれることを希望し，とうとう最後には，アラブ人の選択に任せて道の上に置き去りにする。しかしこのダリュの思いはアラブ人には届かず，アラブ人は仲間がいるであろう高原ではなく，警察のいる町のほうへと歩いていってしまう。そしてダリュにとっては最悪であろう結果が訪れる。

> 少々後に，教室の窓の前に立って，教師は見るともなしに，新しい光が，空の高いところから高原の地表すべてに飛びかかるのを眺めていた。彼の後ろの黒板上には，フランスの蛇行する大河のあいだに，下手な，チョークで記された書き込みがあらわになっていた。それをダリュは読んだ。「おまえは俺たちの兄弟を引き渡した。償いをしろ。」ダリュは空，高地，その向こうの，海まで広がっている見えない大地を眺めていた。彼がそんなにも愛したこの広い土地の中で，彼は一人きりだった。[23]

この部分はダリュの善意が全く誤解され，彼がいかに信念を持ってこの土地で教育を行っているとしても，もはやこの場所では同化教育は必要とされていないということを意味している。「カビリーの悲惨」で，アルジェリアにおける教育の重要さを強調しているカミュにとって，この教育の挫折はフランス-アルジェリア共同体の挫折をも意味しているということでもある。このことについて，カミュは，「植民地化が正当性を持つならば，それは植民地化された側の人格を守る時だけだ」と1939年の「カビリーの悲惨」で書いている[24]が，それから16年もたった1955年に，『レクスプレス』紙に載せた「アルジェリアの未来」でもまったく同じことを言っている[25]。アラブ人の権利向上なくしては植民化している意味などないという考えはカミュの変わらない信念であった。教育を受けたアラブ人の一部に市民権を与えるという，1938年のブルム-ヴィ

オレット法案のコロン[26]の反対による廃案，1948年のアルジェリア組織法のアラブ人権利向上の不実施などをカミュは常に意識しており，16年経ってもカミュの基本的な考えは変わっていなかったのである。このときにアラブ人たちに（一部であるとは言え）市民権を与えるこれらの法案さえ通っていれば，アルジェリア戦争のような混乱は避けられたであろうというカミュの考えが伺える。

カミュがアラブ人の権利向上にこだわる理由としては，アラブ人と，自分たちのような「アルジェリアのフランス人」は貧困さと土地へのこだわりにおいて同等であるという意識がある。この貧困と土地へのこだわりについて，カミュは『最初の人間』でアルジェリアに入植してきたヨーロッパ人の状況を説明している。彼らは約束された土地を夢見て，平底船でやってきた。到着した荒れ果てた土地で女たちは涙を流していた。コレラで日に10人は死に，アラブ人はたびたび襲ってきた。それでも一世紀以上も人々は地面を耕し，子供を産んでは消えていった[27]というように，「アルジェリアのフランス人」（フランス市民権を与えられたスペインやイタリアなどの出身者も含む）の歴史は，貧困と苦悩から来るアルジェリアに対するこだわりの意識に捕らわれている。つまり「アルジェリアのフランス人」はこのような記憶を共有しているのである。ここでは他人の記憶も自分の過去の記憶として統合され，ひとつの集団的な記憶となっている。日々生きることで精一杯であった彼らにとって，個人の記憶などはないに等しい。カミュは『最初の人間』の第一部の終わりの部分で次のようにまで述べている。

> 彼の中では地中海は二つの世界に分かれていた。一つは計算された空間の中で，記憶と名前が保存されている世界であり，もう一つは砂嵐が空間の中で人間の足跡を消してしまう世界であった。ジャックは匿名性と無知で執拗な貧困生活を抜け出そうと努力してきた。[28]

人々が存在していた痕跡などは，砂が消し去ってしまう。そこには歴史も名前さえもなく，すべての人間が常に「最初の人間」（premier homme）となる。そしてジャックは自分がこのような「種族[29]」（la tribu）に属しているのだという認識まで持つのである。「客」でも，この同族であるという意識については，

ダリュがバルデュッシに反抗しながらも気遣う次の部分からも分かる。

> ダリュはバリュデュッシのことを考えていた。彼はバリュデュッシに心痛を与え，追い払ったのだ。ある意味では，同じ穴の中には居たくないかのように。ダリュは再び憲兵の「あばよ」の声を聞いていた。なぜだか分からないが，彼は自分が奇妙に空虚で傷つきやすく感じていた。(30)

つまりこの部分で，ダリュは自分がバルデュッシのような仲間と思われている「種族」を傷つけたと感じたのである。このような「種族」としての「アルジェリアのフランス人」であるという意識は，アラブ人と同じようにアルジェリアという土地に自分たちも居る権利があるのだという思いを代弁しているといえる。だからこそカミュは上記したように「植民地化が正当性を持つならば，それは植民地化された側の人格を守る時だけだ」と言わなくてはならなかった。残念ながら，「客」の最後ではアラブ人側によってダリュは拒絶されることになる。しかし民族同士ではなく，個人的な関係において必ずしも対立しているだけではないということをカミュが強調していることは，アラブ人に対しての「アルジェリアのフランス人」の気持ちの代弁であったろう。それは次のような部分から窺える。

> アラブ人は目をくらませる光の下で，目をあけており，まばたきしないように努めながらダリュを見た。
> 「俺たちと一緒に来てくれ」アラブ人は言った。(31)

ここではアラブ人は，憲兵とやりあったダリュに対して，明らかに親しみを覚えており，一緒に来て自分を弁護してもらいたいというような様子に見える。ダリュのほうも自分の部屋に泊めたアラブ人に対して，打ち消そうとはするものの，強い敵意はない。

> 一年前から，一人で寝ていたこの部屋で，その存在（アラブ人）はダリュを気詰まりにしていた。しかし同時にその存在が彼を気詰まりにしていたのは，なぜならばその存在がダリュに，ある種の友愛を強いていたからであっ

た。ダリュは現在の状況ではそれを拒んでいたが，その友愛をよく知っていた。同じ部屋を分け合った人間は，兵士だろうが，囚人だろうが，不思議な絆を結ぶものだ。衣類とともに甲冑を脱げば，彼らの違いを超えて，夢や疲労の古い共同体の中で毎晩つながっていたかのように。[32]

カミュの考えとしては，アルジェリアという土地の上で同じように暮らし，その土地を愛する人々は兄弟であり，フランス-アルジェリア共同体は民族の平等なくしてはありえない。そのためにはブルム-ヴィオレット法案のようなアラブ人への市民権の付与，そして「カビリーの悲惨」で強調している教育の普及，つまり「ヨーロッパ人教育と原住民教育を分ける不自然な障壁を取り除いたその時，カビール人は多くの学校を持つだろう。そしてその日，そこでは，同じ学校のベンチの上で，理解しあうのに適した二つの民族が，知り合い始めるだろう[33]」というような民族の融和を実現するべく，若い頃の共産党でのアラブ人の党員獲得活動，「カビリーの悲惨」に代表される，新聞での植民地政府の告発といった活動をカミュは一生を通じて続けてきたのである。

## 結　び

以上見てきたように，カミュは確かに同化政策の推進者であった。同化政策が植民地主義の代名詞となっている現代においては，植民地主義者カミュという見方も仕方がないかもしれない。しかしカミュを植民地主義者であると決め付けるとしたら，ある前提が必要であるように思われる。それは，「フランスは植民地において完全な同化政策をしていた」という前提である。確かに未開の土地を植民地にし，フランスに「同化」させるのが「文明化」であるというのは，フランス植民地帝国のスローガンであった。しかし実際にアルジェリアで行われていたのはフランス人とアラブ人を区別した分割統治であった。さらにアラブ人に対しては，ムスリムの身分を捨てなくてはフランス市民権を与えないはずであるのに，アルジェリアのユダヤ人にはユダヤ教を捨てなくても市民権が与えられ，ユダヤ人はヨーロッパ系アルジェリア人の下層民の立場におかれていた。アルジェリアの被植民者の中でもアラブ人よりもカビール人（ベルベル人）はヨーロッパ人に近いという「カビール神話[34]」によって，カビー

ル地方には異なる行政制度が敷かれ，つまり被植民者の中でもさらに分割統治されていたのである。カミュの理想とするのが，このような分割統治のない平等な民族の共同体であるのは上記した。しかし，実際にはまったくといってよいほど同化はアルジェリアでは進められていなかったのであり，フランス人と同じ権利や教育をアラブ人に認めて，その後に共存の対話がなされることをカミュは希望していたのである。コロンのような完全な植民地主義者とカミュのような同化政策の徹底を訴える人々との差異を考えることは必要である[35]。説明してきたように，カミュの行動が示していたのは，「アルジェリアのフランス人」の最低限のモラルの尊重だったのである。しかし，ダリュの挫折は建て前でしかなかったアラブ人の進歩と同化を真摯に実行してきた教師たち，そしてカミュ自身が，FLNのテロ，フランス軍の拷問による泥沼のアルジェリア独立戦争によって，アルジェリアの現実世界からも拒否されたことを意味している。そしてアルジェリア戦争が激化していた，この「客」を書いた頃，カミュはもはや自分が必要とはされていないことを認識していたと思われる。現実との乖離を深く感じていたカミュは，最後の作品『最初の人間』における少年時代への回帰，そして父親，つまり「アルジェリアのフランス人」の歴史の探求へと向かっていくことになる。「客」は自伝的な小説とは言えないが，そこには『最初の人間』で示されるカミュの「アルジェリアのフランス人」としてのアイデンティティである「モラル」や「種族」を同じように見ることができるのである。

---

(1) Olivier Todd, *Albert Camus, une vie,* Gallimard, 1996, Folio, 1999, p.41. なお訳出については，有田英也・稲田晴年訳『アルベール・カミュ〈ある一生〉』(毎日新聞社，2001年) を参照させて頂いた。

(2) 1957年のカミュのノーベル文学賞受賞時の演説は，ルイ・ジェルマンに捧げられている。

(3) *L'hôte in Albert Camus, Théâtre, récits, nouvelles,* Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1962, pp.1612-1613. なお訳出については，佐藤朔・窪田啓作訳『転落・追放と王国』(新潮社，1968年) を参照させて頂いた。

(4) この「カビリーの悲惨」は，1939年6月5日から15日までアルジェの新聞 *Alger Républicain* に連載された。この新聞は人民戦線系の新聞であり，カミュは創刊当初から関わっていた。

(5) *Misère de la Kabylie in Albert Camus, Essais,* Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1965, p.922.
　これについては，カミュ研究家 Jacqueline Levi-Valensi もダリュとカビリーの教師たちは無関係ではないと述べている。

Cf.Jacqueline Lévi-Valensi, *La Condition Sociale en Algérie* in *AlbertCamus5, journalisme et politique, Lettres*

Modernes, 1972, p.31.
(6) *L'hôte,* op. cit., p.1611.
(7) アリステア・ホーン，北村美都穂訳『サハラの砂，オーレスの石――アルジェリア独立革命史』，第三書館，1994年，pp.76-78.
(8) アブドゥ・ムームニ，加藤晴久訳「われらが祖先ゴール人――植民地教育の性格」，西川潤編『アフリカの独立』，平凡社，1973年，p.72.
(9) *Albert Camus,une* vie,op.cit.,p.53.
(10) Albert Camus,*Le premier homme,*Gallimard,1994,Folio,2000, p .162.なお訳出については，大久保敏彦訳『最初の人間』（新潮社，1996年）を参照させて頂いた。
(11) *Albert Camus, une vie,* op. cit., p.54.
(12) フランス植民地下のアルジェリアの自治体は三つの形態に分けられていた。それは完全施行町村（les communes de plein exercice），原住民村（les communes indigénes），そしてここで言われている混合町村（les communes mixtes）である。完全施行町村はフランス人が多数の町村であり，町村議会が首長の選出や予算を決定し，自治が認められていた。それに対して原住民村はフランス人がまったくいない村であり，軍人行政官が統治していた。そして混合町村は言わば完全施行町村と原住民村の中間であり文官行政官が統治し，フランス人が増加すればいずれは完全施行町村となることになっていた。つまり市民権を持っているのは，完全施行町村のみであり，それもフランス人にしか権利がなかったのである。
(13) *L'hôte,* op. cit., p.1614.
(14) ibid., p.1616.
(15) *Noces in Albert Camus, Essais,* Bibliothéque de la Pléiade, Gallimard, 1965, p.72.
(16) *L'étranger in Albert Camus, Théâtre, récits, nouvelles,* Bibliothéque de la Pléiade, Gallimard, 1962, p.1146.
(17) 内田樹『ためらいの倫理学――戦争・性・物語』，冬弓舎，2001年，pp.224-225.
(18) Jean-Francois Lyotard, *La condition postmoderne,* Les Editions de Minuit, 1979, p.7.
(19) 『ためらいの倫理学――戦争・性・物語』，前掲書，p.229.
(20) *L'homme révolté,* in *Albert Camus, Essais,* Bibliothéque de la Pléiade, Gallimard, 1965, pp.575-576. なお訳出については，佐藤朔，白井浩司訳『反抗的人間』（新潮社，1973年）を参照させて頂いた。
(21) *L'hôte,*op.cit.,p.1613.
(22) ibid.,p.1611.
(23) ibid.,p1623.
(24) *Misere de la Kabylie,* op.cit.,p.938.
(25) *L'avenir algérien* in *Cahiers Albert Camus* 6, *Albert Camus éditorialiste á L'Express,*Gallimard, 1987, p.48.
(26) カミュが使う「コロン」(colon)という言葉は，一般的に使われるような，植民者全体ではなく，アルジェリアの支配階級にあたるフランス人の裕福な階級を指す。貧困な労働者階級出身のカミュは，自分たちのことをコロンとは呼ばず，区別して「アルジェリアのフランス人」(les Francais d'Algérie)と呼んだ。
(27) *Le premier homme,* op.cit,pp.204-211.
(28) ibid., p.214.
(29) ibid., p.213.
(30) *L'hôte,* op. cit., p.1621.
(31) ibid., p.1619.
(32) ibid.,p.1620.
(33) *Misére de la Kabylie,* op.cit.,p.923.
(34) カビール人，つまりベルベル人はアラブ人とは異なり，「ローマ人の末裔」，「隠れキリシタン」で

あり，フランスに同化しやすいであろうという「伝説」があった。

Cf.宮治一雄編『中東のエスニシティ――紛争と統合』，アジア経済研究所，1987年，pp.171-172.

(35)　これに関して茨木博史は，「フランス」の「正義」を期待し続けたカミュの作品の人物たちが，「フランス領アルジェリア」の存続を表面上求めているように見えるとしても，フランス本国からの旅行者，政治家等と単純に同一化して見てしまうことは，立場やアイデンティティの違いを無視した単純化であろうと述べている。

Cf.茨木博史「『異邦人』から「客」へ――二人の植民者の肖像」『カミュ研究』6，青山社，2004年，pp.48-49.